

新 刊 紹 介

新
刊
紹
介

1. 新版八尾市史 古代・中世史料編

八尾市史編纂委員会・同編集委員会編

2. 戦国期の伝馬制度と負担体系

(戦国史研究叢書 18)

野澤隆一著

3. 戦国合戦〈大敗〉の歴史学

黒嶋敏編

4. ペルペトゥアの殉教

——ローマ帝国に生きた若き女性の死とその記憶——

ジョイス・E・ソールズベリ著

後藤篤子監修 田畑賀世子訳

八尾市史編纂委員会・同編集委員会編 『新版八尾市史 古代・中世史料 編』

八尾市 二〇一九・三刊

B5 六三三頁 四〇〇〇円

八尾市は大阪市の南東部に接し、河内の中央部に位置する。この地域は、六世紀に物部守屋の最期の地として歴史の表舞台に登場して以来、中央の政治情勢と強いつながりを持ち、史料上の所見にも恵まれる。

本書は、八尾市域の古代・中世にかかわる多様な史料から重要なものを選定し、市民の利用を視野に入れた工夫を凝らしつつ、一冊にまとめたものだという。旧版『八尾市史 史料編』の刊行から六〇年近くが経ち、一九八七年開館の八尾市立歴史民俗資料館の顕著な活動もあり、この地域の中世史料の調査・研究は格段の進展を見せている。その成果を摂取した新たな史料集は学術的にも非常に意義深いものとなった。

三部で構成され、第一部は「古代 史料編」。史料の性格に応じ、訓点を加えた原文のほか、現代語訳・語注・解説を掲げ、

九六(二五〇)

ルビを多用するなど、読みやすさの重視がうかがえる。「物部守屋と聖徳太子の争い」の章では日本書紀以外に複数の中世太子伝を載せるなど、多角的な視点も示す。

第二部「中世 市内所蔵史料編」が本書の眼目。市域に伝わった七つの文書群の中世文書(下限は大坂夏の陣)について、一通ごとに写真・釈文・解説を掲げ、適宜語注を加える。ただし、法量や形態に関する記載はない。全国最古の木札とされる北条時政制札が残る玉祖神社、畠山満家の位牌所であった禅宗寺院真観寺、八尾地藏堂と称された常光寺、久宝寺寺内町から八尾に移った真宗寺院慈願寺と顕証寺、一七世紀初頭創建の八尾別院大信寺、久宝寺の土豪で道頓堀の開創にあたったことで知られる安井家(現在は大阪歴史博物館所蔵)、以上に残る約一五〇通を収める。応仁の乱以前の文書はわずかで、一六世紀の畠山・三好両氏の発給文書の比率が高い。多くは旧版に収められ、その後も八尾市立歴史民俗資料館などによって詳細な史料紹介がなされているが、写真をまとめて披見できる利点は大きい。戦国期の畿内政治史や寺内町の研

究にあっては必須の史料集になる。見比べて釈文の訂正もできる。たとえば、真観寺文書一号藍田崇瑛書状の「此方重宝至候、権一送給候」とあるのは「此方重宝にて候橙一送給候」となるう。

第三部「中世 テーマ別史料編」は、平安時代の荘園形成、鎌倉時代の荘園と寺院南北朝内乱から室町時代へ、室町・戦国時代の戦乱と地域社会、豊臣時代の中河内、という五つの章を立て、節ごとに概説を配し、網文・史料名・原文を載せ、解説・語注を加える。解説は人を得ており、詳しく有益な記述が多い。テーマ別とはいきなり時代で区切られ、同一の寺院や荘園に関する史料が各章に散在するので、按文で連関を示すなどの工夫が欲しいところ。

巻頭のカラー図版は、主として市内主要寺院の現在の様子とともに文書の標本を収め、市域外に伝わった史料から大乘院尊尊筆の明応二年御陣図（福智院家文書）も載せる。巻末には参考文献を掲げる。

最後に、本書の問題点として収載史料の選定基準が見えにくいことをあげたい。旧版との関係について言明がなく、第二部所

収の文書群以外に市内に所在する中世文書にいかなるものがあるのかもよくわからない。序・凡例などにもう少し丁寧な記述があれば、より使いやすくなるはず。有用な史料集であるだけに、注文に及んだが、戦国期の畿内に関心を有する人には是非ともお勧めしたい一冊である。（末柄豊）

野澤隆一著

『戦国期の伝馬制度と負担体系』

（戦国史研究叢書 18）

岩田書院 二〇一九・六刊

A5 三一八頁 六八〇〇円

本書は、長年高等学校の教壇に立ちながら研究を重ねてきた野澤氏が、伝馬制度と負担体系という二つの視点の成果を一書にまとめ、宿と郷村の在り方を考察して新しい戦国期社会像の提示を試みた論文集である。

第一章「戦国期の伝馬制度」では、戦国期に至る過程として第一節で「鎌倉時代の伝馬制度」、第二節で「中世後期の伝馬役」

を確認する。前者は鎌倉時代の伝馬制度を総合したもので、御家人領内や荘園内での課役、古代以来の宿駅への徴発などを明らかにし、それらが地域的臨時的な負担であったとする。後者は、中世後期において戦国期伝馬の萌芽とされる「守護伝馬役」について、実際は荘園伝馬やそれまで寺社が築いてきたもので、積極的に機能していなかったことを指摘する。第三節は「後北条氏の伝馬制度」で、駄賃の伝馬手形による振り分けや公方伝馬が必ずしも無賃伝馬とは同義でないことを指摘。付論「後北条氏と伝馬役」と併せ、後北条氏の伝馬制度が中世伝馬役とは基本的に異なり、近世的伝馬役負担体系への第一歩と位置付ける。第四節「今川氏の伝馬制度」では、一疋一里一銭の有賃が原則であること、特定商人への委任ではなく各支城領主を窓口とした地域経済圏へ連鎖的な通送をしたことを示す。第五節「武田氏の伝馬制度」では伝馬役と新宿について考察し、武田氏は駿東地域復興のための新宿建設を行い、特権付与によって散在の馬方を集め伝馬屋敷を与えて伝馬衆としたこと、馬方は復興と流通の

主体となつていったことを指摘する。

第二章では、拔地売券・寄進状をもとにして新たな加地子の存在形態の提示を試みる。第一節「加地子試論」では、今川・武田各領国内での具体例から、増分論争には、加地子得分に對する理解と、在地剩余分Ⅱ増分が大名権力に包摂されていく視角が不足していたことを指摘する。第二節「戦国期の買地安堵」では江北地域の売券・寄進状の分析から、土地集積と寄進の關係や斗代、売価の推移、内徳が定量化した得分としての加地子と称されたことなどを提示。買地の所有権の不安定さは買地の給地化希求へとつながり、結果として大名権力の知行体系に取り込まれたとされる。第三節「戦国期越前国の負担体系と朝倉氏」では、まず越前国における莊園制下での名内徳分の存在形態を確認する。次いで敦賀郡善妙寺領の検討から、朝倉氏が永禄十三年に總寺領を差し出させ、寺納分の五分の一を納入させたことから、寺庵の内徳の一部を権力内部に役体系として組織化したとみる。第四節「後北条氏と段錢」では、室町期の東国で存在した役夫工米のような臨時的公

田段錢体系が十五世紀には衰退し、後北条氏は公田・非田問わず段当四〇文の本段錢を設定して新しい段錢体系を創出したことを指摘する。

最後に大名権力、問屋・名主、馬方・作人の一探的結合のもとに伝馬の宿や本役・段錢負担地の郷村が構成され、宿と郷村はセツトとして両者の設立が地域的經濟圏の創出へとつながると述べて結語とする。

掲載論文のいくつかは初出時から年月を経て研究状況にも変化があるが、いずれもなお参照すべきものであり、本書は、今後の伝馬制度・負担体系両方面において欠かすことのできない成果である。(山下智也)

黒嶋敏編

『戦国合戦〈大敗〉の歴史学』

山川出版社 二〇一九・五刊
A5 二九六頁 一五〇〇円

本書は二〇一七年十二月に開催された、戦国時代の〈大敗〉に関する公開研究会の成果論文集である。以下、各論文の要点を、

簡潔にまとめる。

金子拓「長篠の戦いにおける武田氏の「大敗」と「長篠おくれ」の精神史」は、天正三年(一五七五)の「長篠の戦い」後に甲斐武田氏が行った対策を軍制面から検討し、「長篠おくれ(長篠での大敗)」の評価が後世の「長篠大敗史観」に至る過程を指摘する。

畑山周平「木崎原の戦いに関する基礎的研究―日向伊東氏の〈大敗〉を考えていくために」では、日向伊東氏が薩摩島津氏に大敗した元龜三年(一五七二)の「木崎原の戦い」に関する編纂史料を整理した上で、両者の形勢逆転の起点を永禄十二年(一五六九)の「戸神尾の戦い」に位置づけている。

八木直樹「耳川大敗と大友領国」は、天正六年に豊後大友氏が薩摩島津氏に大敗した「耳川の戦い」後、大友領国における一年間の情勢を分析し、耳川大敗と大友領国の「瓦解」「崩壊」を結びつける論調に批判的な見解を示す。

山田貴司「大内義隆の「雲州敗軍」とその影響」は、天文十二年(一五四三)に周防大内氏が出雲尼子氏に大敗した「雲州敗

軍」の実態を検証し、戦後の大内領国内部や幕府・朝廷との関係が変化した点に注目している。

田中信司「江口合戦―細川氏・室町幕府將軍の「大敗」とは」では、天文十八年の「江口合戦」後、室町幕府と細川氏綱、三好長慶の権力が並立する状況にあったことが結論として示され、当時の幕府と三好政権のあり方についても見解が述べられている。

播磨良紀「今川義元の西上と〈大敗〉―桶狭間の戦い」は、永禄三年に今川義元が織田信長に大敗した「桶狭間の戦い」の背景と、今川・織田両軍の状況を分析し、両者の実際の軍勢数には大きな差がなかったことを指摘する。

福原圭一「〈大敗〉からみる川中島の戦い」は、永禄四年に上杉謙信と武田信玄が対決した「第四次川中島の戦い」を上杉氏の大敗と結論づける一方で、川中島の「大敗」が謙信による動員体制の強化につながった点を評価する。

谷口央「三方ヶ原での〈大敗〉と徳川家臣団」は、元龜三年に徳川家康が武田信玄に大敗した「三方ヶ原の戦い」を、近世初

期に成立した記録史料を基に分析し、その情報が後世の松平（徳川）中心史観の形成に寄与したことを指摘する。

黒嶋敏「伊達家の不祥事と〈大敗〉―人取橋の戦い」では、天正十三年の「人取橋の戦い」と、その契機となった伊達輝宗の横死を伊達家の「不祥事（敗軍）」と評価する一方で、〈大敗〉が後世に「苦戦」として認識されていく過程を論じている。

本書は大敗を衰退・滅亡に直結させる一般的な見解を否定し、大敗後の動向を中心に据えた点に特徴がある。では、なぜカッコ付きの〈大敗〉なのか。気になる方は冒頭の黒嶋敏「序 〈大敗〉への招待」で〈大敗〉の定義が示されているので、ご一読いただきたい。（鈴木将典）

ジョイス・E・ソールズベリ著
後藤篤子監修 田畑賀世子訳

『ペルベトゥアの殉教』

——ローマ帝国に生きた若き女性
の死とその記憶——』

白水社 二〇一八・八刊
四六 三四四頁 五二〇〇円

本書はJ. E. Salisbury, *PERPETUA'S PASSION: The Death and Memory of a Young Roman Woman*, Routledge, 一九九七年の全訳である。表題に掲げられたペルベトゥアは三世紀初頭に北アフリカのローマ属州都市カルタゴで殉教した若きキリスト教徒で、彼女と仲間たちの処刑の様子が、それに先立つ裁判、獄中でペルベトゥアが見た夢などを記録したとされる『ペルベトゥアとフェリキタスの殉教』は、初期キリスト教の殉教者史料の中でも最初期から最も愛され普及したテキストの一つである。原著者ソールズベリは元来西洋中世史家であったが、古代ローマ期のキリスト教殉教に並々ならぬ関心を抱き原著を執筆した。本書の基本的な目的と方法論は、

「人間の行動は、世界をどう理解するかというところから生じる。つまり、人々の行動は、人々の信念と一致しているということである。…生きる理由がたくさんあるにもかかわらず、熱心に死を望んだペルベトゥアという一人の殉教者に焦点を当てることで、殉教という行為そのものを、そして、その背景にある思想の対立を研究しようと私は決意した。」(二〇頁) という「はじめに」の一文によく表れている。

こうした目的と方法論に従い、原著者は第一章「ローマ」、第二章「カルタゴ」、第三章「キリスト教共同体」で、ペルベトゥアが属した社会の思想的な状況を把握することで、彼女と仲間たちの行動と心理の背景を確定しようと試みる。特にセプティミウス・セウェルス帝期の皇帝礼拝、かつてのカルタゴ帝国期よりの伝統としての人身御供や供儀としての自殺、ローマの伝統的教養を持っていたと想定されるペルベトゥアやその父親と、家族とは違う共同体である教会に生きる若き女性などの像が想定される。

第四章「牢獄」、第五章「闘技場」は、

前章までに描かれた背景を踏まえての『ペルベトゥアとフェリキタスの殉教』テキスト分析の場である。ペルベトゥアのものとする手記、とりわけ夢や幻視を、古代世界の夢占いや旧約文書を手掛かりに解釈し、目撃者がつづる闘技場での殉教者らの振る舞いを、ローマの見世物やキリスト教護教家の文章という文脈から解説する。第六章「余波」は、アウグスティヌスの説教などを手掛かりに、この殉教物語がキリスト教社会に残し続けたインパクトを提示する。

原著は誤記・事実誤認も多く、監修者・訳者が様々な種類のローマ期の文献史料を踏まえて読みやすい訳書にした苦勞が推察される。同時に、原著刊行時においても古めかしい行論が多かった本書の翻訳に時間がかかってしまったことは残念である。三世紀のローマ世界におけるキリスト教徒と社会のかかわり方の多様さについては、例えば保坂高殿氏の一連の著作などと合わせ読まれることをお勧めしたい。(大谷哲)